

## 論文審査の要旨

報告番号	理工研 第451号	氏名	岡松 道雄
審査委員	主査	木方 十根	
	副査	鯨坂 徹	二宮 秀與

学位論文題目 地方都市の公的空間活用における仮設手法の有用性  
(Usefulness of transient approach for utilizing public space in local city centers)

## 審査要旨

岡松道雄氏より提出された学位論文及び論文目録等をもとに学位論文審査を実施した。本論文は地方都市の道路等公的空間における仮設建築物・工作物を用いた活性化手法の有用性について述べたもので、序・結論、および二部構成・全5章の本論によって構成されている。

序では、研究の背景として、地方都市の中心市街地の衰退、本論文に関する既往研究を整理したうえ、研究対象の定義付けと研究目的の提示、研究方法と論文の構成の説明がおこなわれている。

第1部では公的空間の活用という研究対象の歴史的・文化的位置づけとその制度化について、主に文献研究によりまとめられている。第1章は日本の都市における公的空間の変遷の概要と仮設物利用の歴史的展開、第2章では、公的空間の活用に関する制度の歴史的展開、以上がそれぞれ整理されている。以上より、特に日本近代における、公的空間の活用に関する伝統的文化や慣習・制度との不連続性の問題が指摘されている。

第2部では、現代における公的空間の活用に関する制度的緩和の過程とその課題、事例に基づく仮設手法の有用性の検証が行われている。第3章では、道路を対象に、1998年以降の路上におけるイベントに関わる道路占用制度の緩和過程について論じられている。当初の特区指定による緩和の導入から近年の大規模な規制緩和による大都市を中心とする活性化の取り組み事例の出現までの18年間の規制緩和の展開を踏まえつつ、主に大都市の事例を中心とした道路の空間機能の回復傾向が指摘されている。一方で地方都市への規制緩和の効果の波及には課題が多いことが指摘された。第4章では、近隣型商店街の空き地を利用した仮設広場がにぎわいの創出に果たす効果、第5章では、路上のイベント空間における仮設物がにぎわいの創出に果たす効果、以上が社会実験に基づき検証されている。第4章では仮設椅子の利用率とその変動の分析から、日影を生むパラソルの効果、催物会場等のイベント施設からの距離が椅子の利用実態に影響すること等が明らかにされている。第5章では、公的空間と私的空間の重層に注目し、仮設物が人々の間のインターフェイスとして機能する実態を、認知度、浸透度といった指標を導入しながら客観的に把握し、その分析により、仮設物の設置により、空地や道路を含めた空間の総合的な再認識がなされることが指摘され、さらにそれを契機とする新たな活用の担い手の参画といった事象が見られたことなどを指摘している。

結論では、以上を総合し、研究成果および残された課題の整理、今後の展望が示されている。

本論文では、公的空間の活用に関する文化や制度の歴史的な不連続性、1998年以降の規制緩和による道路の空間機能の回復傾向と地方都市に残された課題、仮設物の活性化に資する機能と効果、以上について明らかにされており、空洞化が進む地方都市の活性化に資する知見として実践への応用が期待できる成果が得られている。よって審査委員会は博士（工学）の学位論文として合格と判定した。